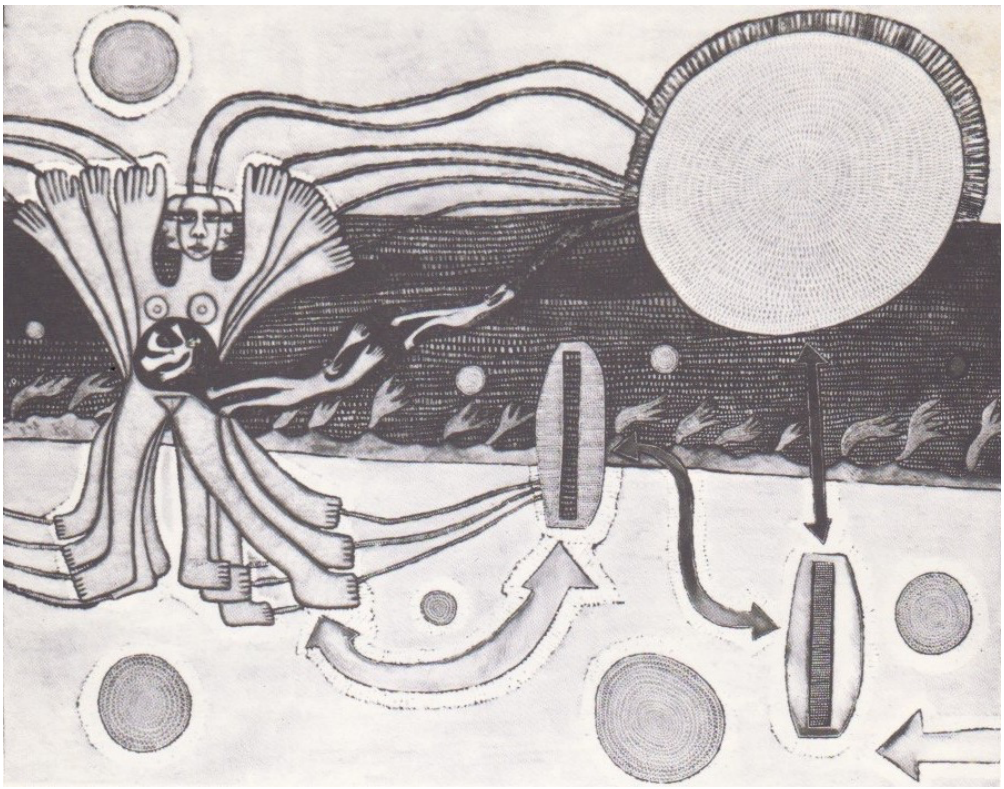

桜井孝身の絵の世界

●深野 治

1

桜井孝身について語ろうとするたびに、私はもどかしさを押えきれなくなる。それは、桜井の絵が持っている輝しい魅力が、依然として私たちのいちばん身近なところで、無理解にさらされ続けているように思えるからである。

桜井の絵は素晴しい、と何度も声高に叫んでも、ときとして「おまえは本当にそう信じているのか」と、なかば疑わしげな、薄ら笑いの視線を感じるのである。これは、周囲に対する私の誤解であろうか。

誤解かもしれないが、私は私の自覚を前にすえて解き明かさなければ、桜井孝身の絵の魅力(価値)をわかってもらえないように思われる。

「桜井孝身は素晴らしい。あの行動力、あの包容力は大したものだ」という賛辞をしばしば耳にする。この賛辞には二重の意味がある。

桜井の行動力、あるいは人間的魅力はたしかに感嘆に価する。九州派をひきいて前衛美術運動に全身を賭けて突進し、戦後美術史の一角に消すことのできない刻印を捺したものは誰か。桜井孝身である。